



前回、エルミターージュに、「夫の病気が治まり、普段通りの生活が過ごせますという主治医の診断を私は待ちわびているのです」と、記しました。日課の散歩では、みなみがおか公園まで出かけ、開花を待っていたミモザの花を見てきました。

そして昨日、「これが一応、これまでの最後の検査だ」と思って、駒込病院に行き、一日がかりで、大腸の内視鏡検査を受けました。その後の診察で、主治医に「次の検査」の日程を示されたのです。この日、寛解の言葉を期待していた私たちは、びっくりし、感謝の気持ちよりも、落胆の気持ちが大きかったです。

でも、主治医は夫の顔色を見、体重が増え、頭髪が伸びてきている様子を喜び、「見事に元気に回復してきていますね。普段通りに暮らしていけます、ただし普段の70%くらいの力でしょう」と言われました。そして、「完治という診断は、何事もなく5年経過したら、言えるでしょう。寛解は、次の組織検査、血液検査、CT検査の結果を待ちましょう」と付け加えられました。手のしびれ、脚のむくみは夫以上に症状が出ている患者を多数見ているから、それくらいは副作用によるもので、特に心配はないとも言われました。私は、自分が前回に、期待して、書いた通りの言葉を聞いたことになったと、今、実感しています。「サクラサク」は、「七分咲き」まで進んだことを感謝しています。



リンパ腫は全身に発生するというその性質上、治療を行ってもがん細胞が完全に消えたことを証明することはできない。そのため「完治」という表現はせず、腫瘍を検出できなくなった時点で「緩解(寛解)」したと表現する。これは、同じ血液のがんである白血病と同様の扱いである。緩解に至ってもがん細胞が残存していることがあって、再発するケースもある。(がん治療.com)という記事を読みました。

遺伝子異常という病気は本当に難しいものです。2~3カ月に一回は検査を受け、慎重に経過を観察しなければならない病気であることを実感しました。医学知識のない身としては、主治医の言葉を信頼し、歩みを続けていくしかありません。高齢者にとっては厳しい治療になりますと言われた意味を理解しつつあります。

エルミターージュの桜もちょうど七分咲きになりました。窓からお花見ができると言っても、このシーズンを楽しんできました。これから普段通りの生活を取り戻していかなければなりません。家族や、教会の皆様、友人、知人と普段通りに、日常を楽しみ、味わいたいと願っています。

夫は家の中では自由に動き回っていますが、私が「お膳立て」(?)したことを受容しているだけです。目下、それがやっとだと申していますが、徐々に、積極的に、「自己責任を担う姿勢」を求めていきたいと思えます。

教会まで行って、礼拝を共に守ることが出来ませんでした。その体力がありませんでした。そのうえ、電話などでも対応する気力も持てない時がありました。一人で、祈り、聖書を読む、讃美歌を聞く、それだけを生き甲斐として、なんとかやってきましたが、これからは少しずつ幅を広げられるのではないかと、楽しみにしています。

社会のことも考えさせられることは多くても、共に生きる表現、アクションは不可能でした。9条の会の友人たちからはいつも励まされてきましたが、ステップ、バイ、ステップで、お仲間の輪に加わっていきましょう。心は弾んでいるのに、まだ、足元はヒョロヒョロです。